

ヨハネによる福音書11章 「命を与え、死なれる方」

1A 命を与える方 1-44

1B 死を許されたイエス 1-16

1C 愛のゆえ 1-6

2C 信仰のゆえ 7-16

2B 死のもたらす悲しみ 17-37

1C よみがえりの約束 17-27

2C 共に泣かれた方 28-37

3B 死者に対する声 38-44

2A 身代わりの死 45-57

1B 自分を生かすための殺人 45-54

2B 過越の祭りにある危険 55-57

本文

ヨハネによる福音書11章に入ります。イエス様は、しばらくエルサレムにいました。仮庵の祭りがあり、それでガリラヤから都エルサレムに上られました。それが10月の初め辺りですが、宮清めの祭りが12月下旬にあり、そこでのユダヤ人と衝突で、イエス様は石打ちになりそうになります。「10:39 そこで、彼らは再びイエスを捕えようとしたが、イエスは彼らの手から逃れられた。」とあります。このようにして、イエス様は身の危険を感じられました。それで、かつてバプテスマのヨハネがバプテスマを授けていた、ヨルダン川の向こう岸のほうに動き、そこに滞在されます。イエス様が、エルサレムを思っているけれども、身の安全のために少し離れたところで待機している感じですね。けれども、そのように待機している中でも、その地域で「多くの人々がイエスのところに来た。」とあり、「10:42 そして、その地で多くの人々がイエスを信じた。」とあります。

みなさんが、行動の自由が、今、かなり制限されている中で、それでも心はぜひ、神の国に向けてください。そして、教会を決して忘れないでください。その中で、たとえ離れていても、その置かれているところで、主が用いられます。

そして今朝は、イエス様の行われたしるしのうちで、最も神の子としての栄光が現れるしるしを見ます。ラザロのよみがえりです。

1A 命を与える方 1-44

1B 死を許されたイエス 1-16

1C 愛のゆえ 1-6

1 さて、ある人が病気にかかっていた。ベタニアのラザロである。ベタニアはマリアとその姉妹マ

ルタの村であった。2 このマリアは、主に香油を塗り、自分の髪で主の足をぬぐったマリアで、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。3 姉妹たちは、イエスのところに使いを送って言った。「主よ、ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」

ラザロ、そしてその姉妹のマリアとマルタの紹介です。「ベタニア」とありますが、これはエルサレムのオリーブ山の東のふもとにある、小さな町です。エルサレムから、3キロぐらい離れたところですよ。イエス様たちが今いるヨルダン川の方面から、徒歩で丸一日かかる距離です。そのベタニアで、ラザロが病気にかかっていましたが、読み進めると、このことをイエス様のところに伝えに行く時には、すでに遅しで、死んでしまっています。

否応にも、志村けんさんのことを思い出しました。症状が風邪のようだったのですが、お医者さんが肺炎と診断、けれども翌日は人工呼吸器をつける時にすでに意識は失われ、それから目覚めることがなかったそうです。あまりにも早すぎる死であり、お兄さんなど近い人に大きな悲しみをもたらしました。ラザロが死ぬのも似ていました。病気になったので、マルタとマリアはイエス様のところに使いをよこします。しかし、使いが間もなく出て行ったから死んでしまうのです。

イエス様に対して、マルタとマリアは、「主よ、ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」と言っています。イエス様と彼女たちが、とても親しい関係であったことは、ルカが証言しています。10章38節以降に書かれています。マルタが家にイエス様を迎え入れました。姉妹マリアがいましたが、彼女は主の足もとに座って、みことばに聞き入っていました。マルタは、もてなしのために心が落ち着かず、イエス様をなじりました。けれども、イエス様は、「ルカ10:41 マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つです。マリアはその良いほうを選びました。」と言われました。マルタは、イエスさまからこよなく愛されていたことがよくわかります。「マルタ、マルタ」と二度も呼ばれています。捕えられる前には、「シモン、シモン」とペテロを呼ばれました(22:31)。

主は、個人的に親しく関わっておられ、あなた個人に思いがあるのだよ、ということ伝えておられます。みなさん一人一人は、「大勢の中の一人」ではありません。イエス様は、一人一人を、ラザロとその姉妹たちを個人的に親しんでいたように、親しく関わってください。しかし、そこには私たちが親しくイエス様とかかわることをこそ、そのような関係が深まってくるのです。今、こういう危機的な時だからこそ、イエス様との慕わしい時間を持ってください。

4 これを聞いて、イエスは言われた。「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることになります。」

先週のお話ししましたように、これが革命的なキリスト教の価値観です。10章において、人が生まれつき盲目で生まれたのは、神のわざが現れるためである、という目的があるからだというもの

でした。神は原因を敢えて語られません。けれども、その苦しみに寄り添ってくださいます。そして、その痛みをもご自分の栄光のために用いられます。そして 11 章では、生まれつき盲目であったという以上に、そもそも人が死んでしんでしまうというところにも、目的があることを教えてくださいます。神の栄光のためのものであると、それだけでなく、「神の子が栄光を受ける」ことであるということです。罪によって世界に死が入りました。その死に打ち勝つことは、それは罪を完全に取り除いたことを証明するものであり、死を滅ぼすことの希望になります。人が罪を犯した時以来の、根本的な治療であり、救いとなります。

5 イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。6 しかし、イエスはラザロが病んでいると聞いてからも、そのときいた場所に二日とどまられた。

ここで大事な接続詞が、間違って訳されているな？と感じます。新改訳第三版では、「しかし」のところが「そのようなわけで」となっています。ギリシア語を調べると、確かに「そのようなわけで」のほうの意味になっています。つまり、イエス様は、マルタ、マリア、そしてラザロを愛しておられたので、だからこそ、ラザロが病んでいると聞いてからも、そこに二日とどまられたのです。

ここに、とてつもないイエス様の愛があります。先ほど、「あなたが愛しておられる者が病気です。」と使いを通してイエス様に伝えた言葉、つまりマルタとマリアの言葉ですが、ここで使われているのは、フィレオの動詞です。そしてここでイエス様が彼らを愛しておられるのギリシア語は、アガペの動詞です。ギリシア語には、愛について少なくとも四つの言葉がありますが、フィレオは、相互関係の愛、精神的な愛です。そしてアガペは、無私の犠牲の愛、霊的な愛です。イエス様は、彼らをアガペの愛で愛しておられたから、病の癒しではなく、死からのよみがえりを見て、神の子の栄光を知ることを選ばれたのです。愛しているからこそ、その痛みはもっと激しいものになることがあるのです。ヨブがそうでしたね。神はヨブがご自分を恐れることを知っておられ、ヨブを信頼しておられたから、だからこそサタンが彼に触れることを許されたのです。

このように神の愛は霊的で、永遠であり、その愛を示される時に、感情的、精神的にはとても辛いところを通ることもあるのだということです。しかし、その向こうにはとてつもない栄光に満ちた祝福が待っています。

2C 信仰のゆえ 7-16

7 それからイエスは、「もう一度ユダヤに行こう」と弟子たちに言われた。8 弟子たちはイエスに言った。「先生。ついこの間ユダヤ人たちがあなたを石打ちにしようとしたのに、またそこにおいでになるのですか。」9 イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるではありませんか。だれでも昼間歩けば、つまりくことはありません。この世の光を見ているからです。10 しかし、夜歩けばつまずきます。その人のうちに光がないからです。」

イエス様が、今はペレアと呼ばれる、ヨルダン川の東におられるのですが、それからエルサレムのあるユダヤ地方に戻ろうと弟子たちに言われました。イエス様は決して無謀なことをなされませんでした。仮庵の祭りに行かれる時に、公に行かずに、内密にエルサレムに入って行かれました。そして石打ちにされそうになり、逃げました。非常に気を付けてご自身の身体に危害が及ばないように対処しておられたのです。

しかしながら、主は、「昼間は十二時間あるではありませんか。」と言われました、主が十字架に付けられ、この世からご自身がいなくなる日は近づいています。ご自身がおられる時に、神の子の栄光を見せる、よみがえりのわざを行う必要があるのだとされたのです。つまり、主がなされようとしていることを行っているうちは、神が守ってくださることを意味しています。主は慎重に動かされましたが、その慎重さの中で大胆に動いて、御心を行われていったのです。主は、父なる神が定めておられた過越しの祭りの日に、ご自身が死なれることが定まっていることを知っておられ、その日までは守ってくださると信じていたのです。

主は、悪魔から、天使が守ってくれるから、神殿の頂から落ちても大丈夫だと誘われた時に、「主を試してはならない」といって抵抗されました。主を試してはいけません。しかし、主の御心を行なうにあたって、主の定められた日が来ないうちは、必ず守ってくださるのです。イエス様は、全世界に福音を伝えなさいと言われて、それで、信じる人にはしるしが伴う、手で蛇をつかみ、「たとえ毒を飲んででも決して害を受けず」と言われました(マルコ 16:18)。私たちがいる宣教地にいた時に、食べるものではないものが混入しているものを、一年ぐらい毎日、摂取していました。今でもその、いわゆる「毒」は、私たちの体内にあると思います。私たちには、どんなに避けても避けられない危険があります。しかし、それが御心を行う妨げになってはならぬのです。むしろ、危害が襲っても、主が必ず救い出してくださることを信じるのです。

11 イエスはこのように話し、それから弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠ってしまいました。わたしは彼を起こしに行きます。」12 弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、助かるでしょう。」13 イエスは、ラザロの死のことを言われたのだが、彼らは睡眠の意味での眠りを言われたものと思ったのである。14 そこで、イエスは弟子たちに、今度ははっきりと言われた。「ラザロは死にました。15 あなたがたのため、あなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいきます。さあ、彼のところへ行きましょう。」

イエス様は、死んでいる人々に対して「眠っている」という表現を使われていました。ヤイロの娘について、「死んでいるのではない、眠っている」と言われました。けれども、これは文字通りではありません。イエス様がはっきりと、ラザロは死にましたと言われています。ここで言われているのは、「死は一時的なものだ」ということです。眠っているのは、いつか起きるから眠っているということです。永遠の眠りはないのです。したがって、「この死は死で終わるものではない」ということです。パウロがテサロニケの人たちに手紙を書いた時に、「I テサ 4:13 眠っている人たちについては、

兄弟たち、あなたがたに知らずにいてほしくありません。あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです。」そして、主イエスが天から来られるにあたって、キリストにあって死んだ者たちがよみがえることを書いています。そしてまだ地上で生きている者については、その後、変えられて天に引き上げられること、すなわち携挙が書かれています。

そして主は、「あなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいきます。」とされています、これまでは病を治すことによって、神の栄光を表しておられましたが、いのちのよみがえりという決定的なことを示し、ご自身に対する信頼、神の子であるということの信頼が与えられるためだとおっしゃっています。

16 そこで、デドモと呼ばれるトマスが仲間の弟子たちに言った。「私たちも行って、主と一緒に死のうではないか。」

トマスは、ちょっと不思議な人ですね。イエス様がよみがえった時に、たまたまそこに居合わせなかった時、「20:25 手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません。」と言った人ですが、疑り深いトマスとしばしばいわれるゆえんです。ただ、彼は疑い深いというよりも、実際的な人ではないか？と思います。ここでは、ユダヤに戻ったら主ご自身も、自分たちも殺される。だから今、殉教の覚悟が必要だということを行っているのですね。

2B 死のもたらす悲しみ 17-37

1C よみがえりの約束 17-27

17 イエスがおいでになると、ラザロは墓の中に入れられて、すでに四日たっていた。18 ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほど離れたところにあった。19 マルタとマリアのところには、兄弟のことで慰めようと、大勢のユダヤ人が来ていた。

イエス様がおられたところからベタニアまでが丸一日かかります。初めに使いがベタニアから遣わされて、イエス様のところに行くのが一日。そしてイエス様はなお二日、留まりました。それから出発して一日かかったので、合計四日です。使いが遣した直後に、ラザロは死んだものと思われれます。三日までなら、蘇生など、それでも奇跡ですが可能性があるでしょう。四日ということは、もう死んだということが確定されます。そして、エルサレムから 15 スタディオンとありますが、約 3 キロです。ですから、エルサレムにいるユダヤ人がここにきて、大勢の人が来ています。ユダヤ人の葬儀には、大勢の人が来て大きく悲しみを示すことによって、その人がどれだけ愛されていたかを示します。時にプロを雇う時もあります。プロの泣き屋です。

20 マルタは、イエスが来られたと聞いて、出迎えに行った。マリアは家で座っていた。

マルタは、イエス様が家にいらしたときにもてなしをする人でしたが、ここでも行動的な姿を見せ

ています。マリアは、思い巡らすタイプ、思索的な人ですね、家に座っています。

21 マルタはイエスに言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。22 しかし、あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになることを、私は今でも知っています。」23 イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」24 マルタはイエスに言った。「終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」25 イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。26 また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。」27 彼女はイエスに言った。「はい、主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております。」

マルタとイエス様のやり取りがとても興味深いです。マルタは、「主よ」と言い続けています。これは、ユダヤ教のラビ以上の方、自分の主であり、神から来られた方であること認めています。そして、ここにいてくださったなら、兄弟は死ななかつたでしょうに、と癒されることを知っていました。さらに、それでも、イエス様が神に求めれば、その願いは聞かれることは今でも知っている、と言っています。マルタには、イエス様に対する絶大な信頼がありました。ところが、「あなたの兄弟はよみがえります。」とイエス様が言われた時に、イエス様がそこまでするとは思いもよらなかつたのです。前回学んだように、旧約聖書にも終わりの日のよみがえりが約束されており、その時によみがえることを信じています。

ところが、イエス様は、「わたしはよみがえりです。いのちです。」と言われます。マルタは、イエス様への信頼はあるのですが、この方こそがその命であり、また命を与える方であるところまでの信仰はありませんでした。この方が神と一つであられることを知りませんでした。また、そこまで今、現実に死んで横たわっている兄弟に、そこまでの信仰を働かせていなかったのです。けれどもマルタは、「はい、主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております。」と答えています。彼女は、イエス様を信頼しているがゆえ、この方が主張されていることをそのまま受け入れ信じていました。神の子キリストで、この方が主であるとしたら、私たちは救われるんですね。けれども、この方にこそ命があるということ、神なんだ、神と一つの方なのだということまで信仰が及んでいないのです。これは私たちに対する挑戦です。たった今、起こっている問題と、自分に与えられている信仰の知識とが遊離してしまいます。しかし、イエス様が生きているということが、今、まさに通っている試練においても生きていることを受け入れているでしょうか？

2C 共に泣かれた方 28-37

28 マルタはこう言ってから、帰って行って姉妹のマリアを呼び、そっと伝えた。「先生がお見えになり、あなたを呼んでおられます。」29 マリアはそれを聞くと、すぐに立ち上がって、イエスのところに行った。30 イエスはまだ村に入らず、マルタが出迎えた場所におられた。31 マリアとともに家において、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリアが急いで立ち上がって出て行くのを見て、墓

に泣きに行くのだろうと思い、ついて行った。

マルタは、マリアにそっと伝えたのですが、他のユダヤ人たちがついて来てしまいました。当時のユダヤ教のことを考えるとこれはすごいことで、ユダヤ教のラビが女性に教師として教えることは、個人的にはほとんどありません。しかし、主の足のところで聞いていたマリアを、イエス様は男の弟子に対するのと同じように、教えておられたことがここでうかがい知ることができます。ところが、ラザロの墓に行くとき他のユダヤ人たちが思ってしまい、その私的な会話ができなくなってしまいました。

32 マリアはイエスがおられるところに来た。そしてイエスを見ると、足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」33 イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になった。そして、霊に憤りを覚え、心を騒がせて、34 「彼をどこに置きましたか」と言われた。彼らはイエスに「主よ、来てご覧ください」と言った。35 イエスは涙を流された。36 ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。どんなにラザロを愛しておられたことか。」37 しかし、彼らのうちのある者たちは、「見えない人の目を開けたこの方も、ラザロが死なないようにすることはできなかったのか」と言った。

マリアらしい悲しみの表し方ですね。イエス様の足元にひれ伏して、泣いています。マルタと同じセリフですが、行動派であろうと思案的であろうと、兄弟の死というむごい現実泣き崩れるしかありません。

ここで、福音書の中でとても珍しいイエス様の行動が記録されています。マリア、他のユダヤ人たちが泣いているのを見て、ご自分も泣かれ、また霊に憤りを覚えておられたのです。ここで、知らなければいけないのは、イエス様は私たちと共に泣かれる方です。しばしば、神は全てご計画を持っておられ、すべてのことを相働かせて益としてくださるという約束を聞いて、たった今、その悲しみのいる人たちが、悲しみを共にされる方なのだということです。イザヤは預言しました、「53:3-4 彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。…まことに彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを知った。」

けれども、ただ悲しむのではなく、霊に憤りを覚えて、心を騒がせておられるのです。何をもって憤っているのでしょうか？それは、「死が人々の中に入っている」という状況に対してです。人は初めに造られた時に、死のために造られていませんでした。永遠に生きるために造られていました。ところがアダムが罪を犯したので、死が世界に入り込みました。私たちにとって、死はだれもがさけることのできないものであることを良く知っています。しかし、死は人の心を引き裂きます。やはり、「どうせ死ぬのだから」では済まないのです、永遠に対する思いが与えられています。それは、元々は死ぬように造られていないからです。

だからヨブは、自分の苦しみの中で生まれてきた日を呪いました(3章)。生まれてきて、その命を喜んで、結局、死ぬ定めであれば、それほどむごいことはない。だったら初めから生まれなければいいではないか？という問いかけです。そうです、これはあまりにも過酷な現実であり、あってはならないことなはずなのです。それに対してイエス様は憤られたのです。その憤りをもって、主は死を滅ぼされるのです。「Iコリ 15:54-15 そして、この朽ちるべきものが朽ちないものを着て、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、このように記されたみことばが実現します。「死は勝利に呑み込まれた。」「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。」「新しいエルサレムでは、死を滅ぼされたことによって、死から来る悲しみも過ぎ去ることが約束されています。「黙 21:4 神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」

3B 死者に対する声 38-44

38 イエスは再び心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓は洞穴で、石が置かれてふさがれていた。39 イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだラザロの姉妹マルタは言った。「主よ、もう臭くなっています。四日になりますから。」40 イエスは彼女に言われた。「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか。」

ユダヤ人の墓は、このように洞窟などが使われ、石が置かれます。イエス様が葬られる、アリマタヤのヨセフの墓は、横に石切りによって彫られたものですが、こちらはもっと地下に奥深くつながっているようなところだと考えられます。「石が置かれてふさがれていた。」と、置かれていたと書いてあるからです。今、ベタニアに行くとラザロの墓と呼ばれているところが残っていますが、私も行ったことがあります。ちょっと階段で降りていったところにあります。

そして、その石を取り除けなさいと言われた時に、マルタは、もう臭くなっています、と常識的なことを言いました。四日経っていたら、臭くなっています。ところが、「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか。」とイエス様は言われるのです。そう、イエス様は今、ここにイエス様がおられることを信じられているか？ということなのです。今、この状況の中にイエス様がおられると信じていますか？私たちの交わりが物理的に分れてしまっていますが、それでも、御霊にあって一つにされていると信じていますか？いつも、物理的に来ているのと同じように、心から捧げていますか？

41 そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて言われた。「父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します。42 あなたはいつでもわたしの願いを聞いてくださると、わたしは知っておりましたが、周りにいる人たちのために、こう申し上げました。あなたがわたしを遣わされたことを、彼らが信じるようになるために。」

イエス様は、父なる神に願っておられました。マルタが、「あなたが神にお求めになることは何で

も、神があなたにお与えになる」と言いましたが、イエス様がそれを行っておられたのです。イエス様には、父を父とする親密な関係がありました。父から言われることのみを行われ、この方に従い、この方からすべてを任せられました。そして 13 章以降、最後の晩餐の後で、イエス様は弟子たちを励まし慰め、「わたしの名によって、父に願いなさい。そうすれば、かなえられる。」と語られたのです。イエス様によって、イエス様が父もっているその親しい関係が、あなたにも引き延ばされているのだよ、ということです。

43 そう言うってから、イエスは大声で叫ばれた。「ラザロよ、出て来なさい。」⁴⁴ すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたまま出て来た。彼の顔は布で包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」

非常に生々しいですね。死者には、長い布が巻かれています。顔もまた布で包まれています。その巻き方はかなりきつく縛られる感じで巻かれています。膝が曲がったりしないように、しっかり巻きます。顎が降りて来て、口を空いたままにさせないために、しっかりと巻きます。ですから、ラザロはかなり、出てきた時に、かなり苦しい状態で巻かれてきたのです。ぴょんぴょんと出てきたのでしょうか、そして顔の布を早く解かないと、息苦しくてやってられません！私のマスク見たいです。(笑)これだけ生で、「死んだけれども、生き返った」という証拠はありません。

ところで、イエス様は、大声で、叫ばれています。主は、終わりの日に御声でもって死人をよみがえらせます。「5:28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。」そして、よみがえると言われました。この終わりの日に神が行われることを、今、その姿を、今のラザロを通してお示しになったのです。アウグスチヌスがこう言いました、「ラザロよ！と個人を特定してくださらないければ、聖徒たちがみな、よみがえってしまったことだろう。」

2A 身代わりの死 45-57

1B 自分を生かすための殺人 45-54

45 マリアのところに来ていて、イエスがなされたことを見たユダヤ人の多くが、イエスを信じた。46 しかし、何人かはパリサイ人たちのところに行って、イエスがなされたことを伝えた。

イエス様が先に、「昼間は十二時間あるではありませんか。」と言われたのは、これです。十字架に付けられる前に、ご自分の神の子としての栄光を見て、信じる人たちがまだ与えられているのだ、ということです。これがあるからこそ、イエス様は危険を覚悟で動かれたのです。私たちは、コロナは確かに切迫した状況です。けれども、もっと切迫した状況があることをわきまえながら、コロナを警戒する必要があります。それは、主が戻られるのはすぐなのだ！ということです。主が戻られるのが近いのだから、主は必ずご自分が救おうと思われる人々を救う働きを活発に行われているのです。コロナは危険です、しかしもっと危険なのは、主が来られるという希望を見失ってしまう、ということです。パウロは言いました、「エペ 5:15-16 ですから、自分がどのように歩んでいるか、あ

あなたがたは細かく注意を払いなさい。知恵のない者としてではなく、知恵のある者として、機会を十分に活かしなさい。悪い時代だからです。」知恵を用いながら、機会を十分に生かすのです。悪い時代だからです。

そして、まさに悪い時代というのは、イエス様が地上におられる時代もそうでした。これだけの奇跡を見ても、なおのこと信じなかった何人がいたのです。不信仰こそが、この世における悪です。かつて、ベテスダの池で癒された男が、ユダヤ人の宗教当局にイエス様を通報しました。自分自身が癒されても、それでも古い皮袋のほうに留まろうとしてしまったのです。これは、恐れからです。「箴 29:25 人を恐れると罾にかかる。しかし、【主】に信頼する者は高い所にかくまわれる。」

47 祭司長たちとパリサイ人たちは最高法院を召集して言った。「われわれは何をしているのか。あの者が多くのしるしを行っているというのに。48 あの者をこのまま放っておけば、すべての人があの者を信じるようになる。そうなると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も取り上げてしまうだろう。」

ここで、最高法院、すなわちサンヘドリンが召集されました。大きな変化が起こります。これまでには、安息日に違反しているとしてイエスを殺そうと思って動いていたのは、パリサイ人が中心でした。けれどもサンヘドリンにおいては、パリサイ派だけでなくサドカイ派もいます。祭司長はサドカイ派です。サドカイ派は、聖書や律法よりも、ローマ帝国の中で神殿礼拝を守るために政治的に動いていた人たちです。なので、イエス様を殺さなければいけないと思った理由が、パリサイ人といささか異なるのです。同じ「殺す」ということで一致し、パリサイ人も政治判断を支持しました。

それは、ユダヤ人の大勢がイエスをメシアだと信じてしまう。そうすれば、メシアに追従する群れができたということで、ローマが弾圧に来る。そうしたら、私たちの持っている既得権益も失われてしまうではないか？ということ。きわめて政治的判断だね。けれども、自分の命を救おうとするものは、どうなりますか？それを失います。まさに、彼らはイエスをメシアとして受け入れなかった。後、熱心党が、反ローマの独立運動を主導しました。そしてローマは鎮圧を行い、サドカイ派の持っていた祭司制度は神殿の崩壊とともに消滅したのです。その反面、イエス様は弟子たちに、エルサレムが包囲されたら逃げなさいと教えておられました。包囲されて、一時、解除された時に彼らは逃げて、ただ一人も死なずに済みました。

49 しかし、彼らのうちの一人で、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは何も分かっていない。50 一人の人が民に代わって死んで、国民全体が減びないですむほうが、自分たちにとって得策だということ、考えてもいない。」51 このことは、彼が自分から言ったのではなかった。彼はその年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、52 また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子らをついに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。

非常に興味深いですね、カヤパは極めて冷酷な政治判断をしました。一人が犠牲になれば、国民全体がローマに滅びないですむのだから、自分たちには得策だろう、ということでイエス様を殺すように判断しました。けれども、その政治的な判断でさえ、実は祭司として神にたてられているゆえに、預言を行っていたというのです。イスラエル人のために、イエス様は身代わりに死なれます。政治的な理由ではなく、罪のゆえです。そして、52節は、イスラエル人ではなく、世界にいる異邦人たちのことです。「神の子ら」とヨハネは言っています。イエスを信じた者は、異邦人であっても、神によって生まれるのです。

53 その日以来、彼らはイエスを殺そうと企んだ。54 そのために、イエスはもはやユダヤ人たちの間を公然と歩くことをせず、そこから荒野に近い地方に去って、エフライムという町に入り、弟子たちとともにそこに滞在された。

イエスを殺すということが、公式なユダヤ人の立場となりました。それゆえに、ユダヤ人の間から避けていかなければならず、ユダの荒野の近くのエフライムという町に入りました。ベタニアから北に25キロの町だと言われています。

2B 過越の祭りにある危険 55-57

55 さて、ユダヤ人の過越の祭りが近づいた。多くの人々が、身を清めるため、過越の祭りの前に地方からエルサレムに上って来た。56 彼らはイエスを捜し、宮の中に立って互いに話していた。「どう思うか。あの方は祭りに来られないのだろうか。」57 祭司長たち、パリサイ人たちはイエスを捕らえるために、イエスがどこにいるかを知っている者は報告するように、という命令を出していた。

時は少し進みます、ついに過越の祭りの時に近づいています。3月下旬の頃です。その時にはユダヤ人たちの中には、イエスがいたら通報するようにというお達しが来ていました。それで、本当に過越の祭りに彼は集うのだろうか？という話し合いがあります。

とても皮肉なことです。イエス様は、ラザロという人をよみがえらせることによって、かえってご自身が殺される道を歩むこととなります。人を生かすために、ご自身が死ななければいけません。しかし、これも神のご計画の中にありました。けれども、その死さえ、神のご計画の中にあります。私たちは、受難週に入っています。イエス様が、エルサレムに入城される日曜日のことです。そして金曜日に十字架に付けられ、三日目によみがえられます。それで次の日曜日は復活祭です。このような形ではありますが、しかし、だからこそキリストの死と命に、我々信者が思い起こす良い時ではないでしょうか？イエス様の抱かれていた緊張感、命が取られるかもしれないけれども、それでもなおこと、世の光として昼間の間に行わなければいけなかったことを行われたのです。